

## 教育番組の主題に関する内容分析<sup>†</sup>

田島祥\*・近江玲\*<sup>\*\*, \*\*</sup>・坂元章\*・一色伸夫<sup>\*\*\*, \*\*</sup>・服部弘<sup>\*\*\*</sup>

お茶の水女子大学\*・日本学術振興会<sup>\*\*</sup>・NHK 放送文化研究所<sup>\*\*\*</sup>

本研究では日本で放送されている教育番組の特徴をつかむことを目的とし、子ども(4~12歳)による視聴率の高い番組の内「教育的である」と判断された33番組を対象に内容分析を行った。教育番組で扱われている主題を分析し、NEAPOLITAN *et al.*(1994)による先行研究の結果と比較した。番組とセグメントの2つのレベルにおいてコード化を行ったところ、どちらのレベルにおいても「自然科学・社会科学」に分類される内容が最も多く、特に「社会科学」が多く含まれていたことがわかった。また、ひとつの番組の中で複数の主題が扱われており、純粋な教科型の番組は少ないことが明らかになった。

キーワード：教育番組，内容分析，主題

### 1. はじめに

テレビはわれわれの生活の中でもっとも身近なメディアである。1998年6月に実施されたNHK 全国個人視聴率調査において小・中・高校生のテレビ視聴時間を調査したところ、その傾向はこれまでの10年間でほぼ安定しており、テレビゲームやインターネットなどのその他のメディア利用が盛んになってもテレビの視聴時間は減少していないことが明らかになった(小平 1999)。このような傾向は今後も続いていくものと予測できる。またBS デジタル放送の開始から窺えるように、テレビの技術面の進歩は著しく、内容面でも更なる充実が期待され、テレビが我々に与える影響は今まで以上に大きくなるものと考えられる。

テレビが子どもに与える影響については欧米を中心

として盛んに研究が行われ、その影響は番組の内容によって異なる可能性が示唆されてきた。中でも教育番組は子どもの認知能力を高める効果が認められており、幼児向け教育番組の視聴が子どもの語彙、読み、計算能力、問題解決能力などの発達にポジティブな影響をもたらすことが繰り返し確認されてきた(向田 2003, 近江 2003)。

しかし、これらの研究の多くは欧米で行われたものであり、日本の教育番組を対象とした研究は森田(1999, 2000)などがあるものの、あまり蓄積されていないのが現状である。そこで本研究は、現在日本で放送されている教育番組を対象に、番組が扱っている主題について内容分析を行うことにした。教育番組に対する内容分析は欧米でも例は少なく、本研究は、教育番組研究を進める上での足掛かりとなる研究であると考えられる。分析の方法はNEAPOLITAN *et al.*(1994)による手法を用いた。NEAPOLITAN *et al.*(1994)では1週間に3時間子ども向けの教育テレビ番組を放送することを義務化した「子どもテレビ法」の基準を満たし、2~10歳児に適した番組を対象に内容分析を行い、子どもにとって情動的な番組が少なすぎることや、娯楽形式の番組が多く、教育的ではない内容が多く含まれていることなどが明らかにされている。本研究では、現在の日本の教育番組の内容を明らかにし、その上でNEAPOLITAN *et al.*(1994)との比較を試みた。

### 2. 方 法

2004年4月5日受理

<sup>†</sup> Sachi TAJIMA\*, Rei OMI<sup>\*\*</sup>, Akira SAKAMOTO\*, Nobuo ISSHIKI<sup>\*\*\*</sup> and Hiroshi HATTORI<sup>\*\*\*</sup>: Contents Analysis of the Content Focuses of Japanese Educational TV Programs

\* Ochanomizu University, 2-1-1, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8610 Japan

\*\* Japan Society for the Promotion of Science, 5-3-1, Kojimachi, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8471 Japan

\*\*\* Broadcasting Culture Research Institute of Japan Broadcasting Corporation, Atago MORI Tower 16F, 2-5-1 Atago, Minato-ku, Tokyo, 105-6216 Japan

表1 コード化に用いたトピック、カテゴリーと各項目の例

7トピック	17カテゴリー	例
身体的に良い状態と運動性の発達	運動性スキルの発達 健康に関する知識	はさみの使い方, ものの投げ方 食事の必要性, 身体の部位や機能
社会的・感情的発達	個人内スキル 個人間スキル	感情の分類, ネガティブな感情への対処 よい友好関係や家族関係のスキル, 文化, ジェンダー
学びへのアプローチ	学びへの積極的な態度の発達 創造性や新奇性の発達 勉強スキル	学ぶことへの喜びや満足の経験 新しい活動への挑戦をいとわないこと, 自己表現の喜び 教室内でのルールについて, 資料の使い方
言語スキル	言語アート 読み書き能力スキル	文法構造, 出来事を描写するスキル 語彙獲得, 言語の基礎能力の発達
認知スキル	一般的認知スキル 問題解決と理論的思考 数のスキル	物理的, 時間的關係の理解 分析表現, 理由の統合 基礎的な算術スキル
自然科学・社会科学	社会科学 自然科学	歴史, 地理, 身近な出来事についての理解 動植物, 自然現象について
教育的でない内容	教育的でない内容 広告 教育的でなく, 番組でない内容	娯楽的内容, ハイライト 製品の広告 他の番組のスケジュール情報など

**対象番組**：より影響力のある番組を分析するため、ビデオリサーチ社による調査の結果子ども（4～12歳）による視聴率が10%以上であった番組を取り出し、その中から心理学を専攻する大学生4名によって「教育的である」と判断された33番組各1話（放送期間は2002年3月4日～10日）を選出した。その際判断基準は明確にせず、視聴者の視点から教育的か否かの判断をさせた。CMを含む、オープニングからエンディングまでのすべてを分析対象とした。NHK教育から29番組、民放局から4番組が対象となった（「つくってあそぼ」「3年B組金八先生」「キティズパラダイス」など）。

**コード化項目**：NEAPOLITAN *et al.*(1994)で使用された7つのトピックと17のカテゴリーを用いた。トピックとカテゴリーの各項目と具体例は表1に示す。

**手続き**：作業は心理学を専攻する大学生・大学院生8名と放送制作・研究の専門家1名による計9名が分担し、1番組につき3名がコード化を行った。各コーダーは自宅にて作業を行った。

コード化はセグメントレベルと番組レベルの2つのレベルで行った。セグメントはNEAPOLITAN *et al.*(1994)に従い、「独立した番組の時間、あるいは主要な時間・場所・主題の変化のない事象」と定義した。コード化作業に先立って筆者らが各番組をセグメントに分割した。

コーダーは、7トピック、17カテゴリーの各々について、各セグメント（番組）を視聴した後に、中心的な内容だと思われたものを「第1主題」、その次に主要な内容だと思われたものを「第2主題」としてコー

ド化した。第1、第2主題以外にも該当するものがあった場合には「それ以外」の主題とし、当てはまるもの全てをコード化した。

### 3. 結 果

セグメントと番組の両レベルにおいて、どのくらいセグメント（番組）がどのような内容を含んでいるのかを検討した。主題の重要性を考慮し、第1主題として報告されたものには3倍、第2主題として報告されたものには2倍の重み付けをし、「第1主題」「第2主題」「それ以外」に報告された各トピック・カテゴリーの合計数を算出した。

#### 3.1. 7トピックを用いた分析結果

セグメントレベルでは、全775のセグメントから4273の内容が報告された。番組レベルでは、全33番組から227の内容が報告された。重み付けをした後の各内容トピックに報告されたセグメント数、番組数が全体に占める割合を図1に示す。左側がセグメントレベル、右側が番組レベルでの結果を表している。両レベルで「自然科学・社会科学」が最も多く、次いで「学びへのアプローチ」「社会的・感情的発達」が多かった。セグメントレベルの方が番組レベルよりも「教育的でない内容」の報告数が全体に占める割合が多かった。

#### 3.2. 17カテゴリーを用いた分析結果

セグメントレベルでは、全775のセグメントから4682の内容が報告された。番組レベルでは、全33番組から258の内容が報告された。重み付けをした後の各内容カ

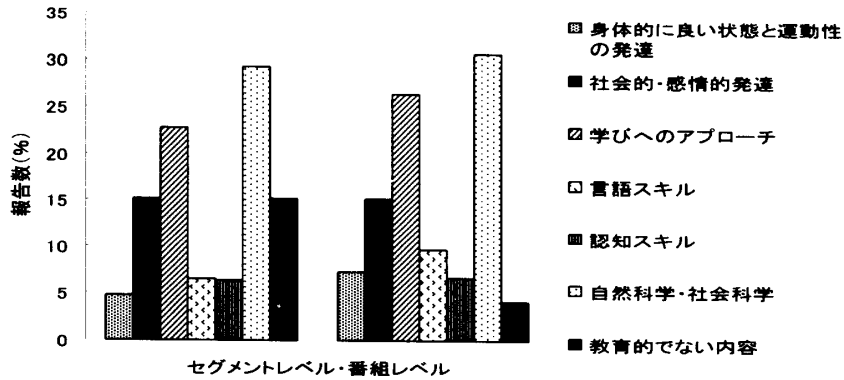


図1 各内容トピックの割合（7トピック）

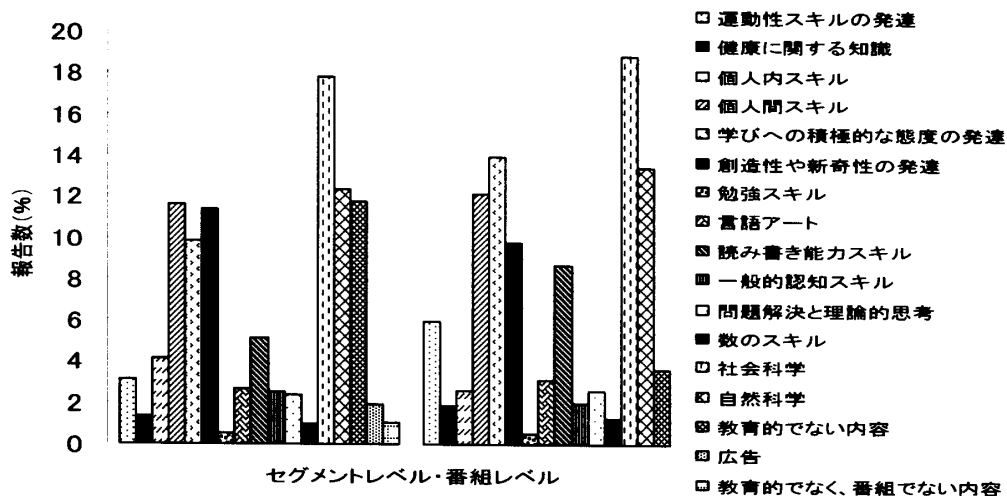


図2 各内容カテゴリーの割合（17カテゴリー）

テゴリーに報告されたセグメント数、番組数が全体に占める割合を図2に示す。左側がセグメントレベル、右側が番組レベルでの結果を表している。両レベルで「社会科学」が最も多かった。セグメントレベルでは次いで「自然科学」「教育的でない内容」が多く、番組レベルでは次いで「学びへの積極的な態度の発達」「自然科学」が多かった。

#### 4. 考 察

##### 4.1. 番組の主題について

本研究では、子どもによる視聴率が高く、「教育的である」と判断された33番組、全775セグメントについて内容分析を行った。セグメント、番組の両レベルにおいて、7トピックと17カテゴリーを用いてコーディングを行った結果、どの場合も5倍以上の数の内容が報告された。このことから、1つのセグメント（番組）の中に複数のテーマが込められていることがわかった。各内容の重要度を考慮して結果をみると、図1と図

2より、セグメントと番組の両レベルにおいて「自然科学・社会科学」に分類される内容が最も多く、中でも「社会科学」に重きがおかれていることがわかった。次いで「学びへのアプローチ」「社会的・感情的発達」が多かった。また、「言語スキル」「認知スキル」「身体的に良い状態と運動性の発達」に含まれる内容が少ないことがわかった。

セグメントや番組の中に複数のテーマが込められているにも関わらず、上記のように項目ごとの報告数に差がみられたのは、各内容項目の性質の違いが影響していると考えられる。セグメントと番組の両レベルで報告が少なかった「言語スキル」や「認知スキル」は、学校教育の中の教科（国語と算数）に関する内容が該当する。一方報告が多かった「社会的・感情的発達」や「学びへのアプローチ」は、教科として指導される内容以外の、学校の教育活動全体を通じて学んでいくような、主に道徳や特別活動に分類される内容であるといえる。「言語スキル」や「認知スキル」といった

教科的な主題は内容が具体的である反面、限定的でもあるため、教育番組の中では番組の中核として扱われることが少ないのではないかと考えられる。一方で「社会的・感情的発達」や「学びへのアプローチ」といった一般教育的な主題は幅広い内容を含んでいるため、それ自体が番組の主な焦点になりうるだけでなく、すでに中核となる内容が定まっている番組の中にも副主題として織り交ぜていくことが可能であろう。したがって、「言語スキル」や「認知スキル」よりも「社会的・感情的発達」や「学びへのアプローチ」の方が多く含まれているのだと考えられる。「自然科学・社会科学」に関しては、「言語スキル」や「認知スキル」と同様に社会科と理科の教科に関する内容ではあるが、「自然科学」は生物と物理と地学を、「社会科学」は歴史と地理をそれぞれ含んでおり、もともと内容の幅が広い分野であるといえる。さらに、その教科内容が我々の日常生活に深く関わるものでもあるため、一般教育的な要素も含んでおり、番組内で多く扱われているのだと思われる。これらの結果からもわかるように、現在放送されている日本の教育番組では純粋な教科型の番組は少ないといえるだろう。

#### 4.2. NEAPOLITAN *et al.*(1994)との比較

NEAPOLITAN *et al.*(1994)では2名のコーダーによる結果が一致した項目のみを分析に用いているため、本研究とは集計方法が異なり、単純に数値を比較することはできない。しかしどちらも教育番組内に実際に含まれている主題が報告されており、主題の順位について両者を比較することは可能であると考えられる。

NEAPOLITAN *et al.*(1994)でも「自然科学・社会科学」が最も多く含まれていたという結果が得られており、日米共に教育番組ではこの分野が特に多く扱われている内容であるといえよう。一方、本研究で「学びへのアプローチ」が2番目に多く報告されていた点はNEAPOLITAN *et al.*(1994)とは大きく異なっていた。この点は日本の教育番組独自の特徴であるといえるだろう。

なお、「教育的でない内容」は本研究ではあまり多く

は報告されておらず、NEAPOLITAN *et al.*(1994)との違いが顕著であったが、これには番組の選択方法の違いが影響している可能性があるため、注意する必要があると思われる。NEAPOLITAN *et al.*(1994)では、子どもテレビ法の規定を満たしていると番組制作局が判断した番組から分析対象を選出していた。制作側が「教育的である」と見なしていても、視聴する側からは「教育的でない」と捉えられる場合はあり得るだろう。一方、本研究の対象番組は視聴する側にある評定者によって選出されたものであるため、より教育的な要素が強く、「教育的でない内容」の報告数が少なくなったのかもしれない。

今後は、番組の主題以外にも、番組内で用いられている技法や番組から得られるイメージなどの視点から教育番組を分析し、より日本の教育番組の特徴を明らかにしていきたいと考えている。

#### 参 考 文 献

- 小平さち子(1999) 子ども向けテレビの課題—番組の質と視聴の質—. 津金澤聰廣・田宮武(編) テレビへの提言 ミルネヴァ書房, 東京, pp.108-129
- 森田健宏(1999) 幼児向け教育テレビ番組に見られる映像技法の実態. 日本教育工学雑誌, 23(Suppl.): 39-44
- 森田健宏(2000) 幼児向け教育番組に見られるショットの種類と画面構成. 日本教育工学雑誌, 24(Suppl.): 159-164
- 向田久美子(2003) メディアと乳幼児 坂元章(編) メディアと人間の発達. 学文社, 東京, pp.2-22
- NEAPOLITAN, D.M., GOSER, L.S. and HUSTON, A.C. (1994) An Analysis of Educational Programs on Network and Cable Television Content of Commercial Children's Programming, 1-72
- 近江玲(2003) テレビと認知能力 坂元章(編) メディアと人間の発達. 学文社, 東京, pp.23-38

(Received April 5, 2004)